

平成21年5月25日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18500484  
 研究課題名（和文） イベント開発とメディア活用によるスポーツ振興キャンペーンの効果に関する縦断的研究  
 研究課題名（英文） A Longitudinal Study on Effects by Sport Promotion Campaign through Event Development and Mass Media  
 研究代表者  
 長ヶ原 誠（CHOGAHARA MAKOTO）  
 神戸大学大学院・人間発達環境学研究科・准教授  
 研究者番号：00227349

## 研究成果の概要：

中高齢者の運動・スポーツ希望種目数に影響する要因は、対象者全体ではレジャー便益期待値、現在の運動・スポーツ実施頻度、健康自己評価レベルであった。次に、男性ではレジャー便益期待値と現在の健康自己評価レベル、女性では支援便益期待値と現在の運動・スポーツ実施頻度であった。最後に、中年期では現在の運動・スポーツ実施頻度、レジャー便益期待値、高齢者では現在の健康自己評価レベルと、レジャー便益期待値であった。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	1,400,000	0	1,400,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	0	3,300,000

## 研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：イベント開発、キャンペーン、スポーツ振興

## 1. 研究開始当初の背景

スポーツライフデータ 2006 によるとわが国の、中高齢者における今後行ないたい運動・スポーツがある割合は 75.2%と高い値を示している。年代別に今後行ないたい運動・スポーツがある割合を見ても、40 歳代の 89.9%から加齢につれて割合は減少していく

ものの、70 歳以上でも 52.2%の割合で今後行ないたい運動・スポーツ種目があると回答しており、多くの運動・スポーツ種目が行ないたいと考えられている。また、内閣府（2006）による体力・スポーツに関する世論調査でも、同様の傾向が示されている。このように、中高齢者においても今後運動・スポ

ーツを実施したいというニーズは高いと考えられる。しかしこれらの報告は、どの種目の割合が高い、低いという現状評価に留まっており、中高齢者個人が、どのくらい運動・スポーツを実施したいとしているのかという点には至っていない。また、運動・スポーツを実施したいという意欲があるということだけを述べるだけに留まっており、なぜ中高齢者においても運動・スポーツを実施したいと思っているかということは明らかにされていない。

これまでのわが国の中高齢者におけるスポーツ振興事業は、大会の開催や運動・スポーツ教室の開催、施設の整備などのハード面に対するものが多く見られ、中高齢者の意識に対するキャンペーン事業などはあまり見られない。施設の整備や、大会の開催などのハード面の整備ももちろん大切であるが、意識啓発や、カウンセリングなどのソフト面に対する事業も重要となる。ヘルススポーツへの参加を促すための全体的なプロモーションの概念枠組みとして、主体者の意識を改善していく事業（プッシュ事業）と、周りの環境を改善していく事業（プル事業）の両方に対する配慮と工夫が必要となる。諸外国に目を向けてみると、アメリカ、カナダ、イギリス、オランダ、オーストラリアなどで、効果的な啓発事業やキャンペーンが行なわれている（長ヶ原、2007）。また、山口（2002）は、これからの高齢者に対する運動・スポーツ振興は非実施者に焦点をあて、組織的なスポーツ種目だけでなく、多様な身体活動プログラムの開発と振興が求められると述べている。

中高齢者を対象とした運動・スポーツに関する研究は、行動の規定要因分析が多く、実施したいというニーズの内容やそのレベルに関する視点は見られない。規定要因分析と

その情報の活用は、プロモーション戦略を成功させる上で重要な役割を持つと言え、運動・スポーツ振興事業や地方計画に多く見られる条件（要因）指標は施設数や指導者数など行政サイドからの指標が主流であり、今後は「住民自身が考える行動条件とは一体何か」といった活動主役の視点に接近した指標作成が事業開発にとって有効な情報となる（長ヶ原、2003）が、運動・スポーツの種目について注目したものはあまり見られない。対象者の運動に対する態度や、ニーズを多角的な視点から分析していくことが求められる。

これまで日本の中高齢者に対する運動・スポーツ振興事業はハード面に対するものが多く、啓発事業やキャンペーン事業はあまり見られない。徳永ら（1980）は、行動意図は行動の決定因とみなされ、その行動意図は態度と規範信念によって予測されるという合理的行為理論をランニング行動について適用し、運動・スポーツに適用可能であると明らかにしている。運動・スポーツを実施したいという意図に影響を与える要因を探ることで、日本の中高齢者における運動・スポーツ振興事業には、あまり見られなかった啓発事業や、キャンペーンを効果的に展開するための新たな知見を得られると考えられる。また、これまでに多く見られる運動・スポーツを実施したという行動への規定要因だけでなく、運動・スポーツを実施したいという行動意図や意欲への要因を明らかにするという、今までにあまり見られなかった視点からの運動・スポーツに対するアプローチが可能であると考えられる。加えて、運動・スポーツ実施希望を頻度や強度ではなく、希望種目数から捉えるという点も従来の研究にはあまり見られない。健康増進を目的とするのであれば頻度や強度を取り上げる必要があるが、昨

今の中高齢者の運動・スポーツ実施に関しては、健康増進以外の関わり方や楽しみ方があると考えられる。そのため、頻度や強度ではなく希望種目数という観点から、運動・スポーツ実施を捉えることに意義を見出すことができるだろう。

## 2. 研究の目的

本研究は、中高齢者における運動・スポーツ実施種目の実施ニーズに影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査方法

本研究では、長ヶ原ら（2002）によって実施された「健康日本 21 地方計画における身体活動目標を達成するための条件指標と測定尺度の開発に関する研究」のベースラインデータを用いて分析を行なう。第一回調査（2001～2002）の5年後の2007年8月上旬から12月上旬にかけて郵送法による質問紙調査を実施した。

本研究の調査対象者は、男女年齢別の人口構成比率に基づき住民基本台帳から比例抽出を行ない、20歳以上の成人男女のランダムサンプリングであり、2002年の調査において今後の調査への協力が得られた者、1240名に調査票を郵送した。2002調査でそれぞれの調査票に付けたID番号を調査票の右下に記入し、2002調査の回答者と2007調査の回答者が同一になるように留意した。有効回答標本数は374、回収率は33.0%であった。10月の初旬にリマインドを送付し、リマインド前の回収で316、リマインド後の回収で58の回答を得られた。

### (2) 調査内容

まず、質問紙（2007調査）の項目として、

個人的属性、健康自己評価レベル、今後行なってみたい運動・スポーツ種目、過去1年間の運動・スポーツ実施日数、これからしてみたい運動・スポーツの楽しみ方や関わり方に関する項目を用いた。

次に、2002年の項目として質問紙（2007年）と同様の項目である健康度自己評価レベルと、過去1年間の運動・スポーツ実施日数を用いた。

健康自己評価レベルについて、2002年は「1. 多いに健康」から「3. あまり健康でない」の3段階尺度を用いた。2007年は「1. かなり不健康」から「5. かなり健康」の5段階尺度を用いた。

過去1年間の運動・スポーツ実施日数については「全く行なわなかった」から「週に4日以上（年201日以上）」の8段階尺度を用いた。

今後行なってみたい運動・スポーツ種目に関しては、スポーツライフデータの実施率の高い種目から65種目を選び、それ以外の種目があれば種目名を自由回答で求めた。

これからしてみたい運動・スポーツの楽しみ方や関わり方は、運動・スポーツで楽しかった経験の自由記述から抽出された39項目を「1. 全く興味がない」から「4. かなり興味がある」の4段階尺度を用いた。

### (3) 分析方法

第一に、2002年調査と2007年調査それぞれの個人的属性項目に関して単純集計を行なう。次に3段階、4段階、8段階の尺度を用いた項目に関しては、等間隔尺度を構成しているものとし、「1」～「3」、「1」～「4」、「1」～「8」の得点を与えて数量化し、2段階の尺度を用いた項目に関しては「1」、「0」のダミー尺度を用いて数量化した。続いて、変数の合成を行なった。これからの

てみたい運動・スポーツの関わり方や楽しみ方の項目について、因子分析から 5 因子を抽出し、これからしてみたい運動・スポーツの関わり方に関する因子解とした。この質問項目は運動・スポーツで期待される便益についての項目であるため、抽出された 5 因子を健康便益期待値、レジャー便益期待値、競技便益期待値、観戦・情報便益期待値、支援便益期待値と名付けた。レジャー便益期待値の「遊ぶ」の因子負荷量が 0.375 と低い値となったが、運動・スポーツの便益に対する期待値を全て包括し、観察する必要があるため「遊ぶ」も含めて、レジャー便益期待値とした。表に各因子負荷量と抽出された因子の Cronbach's  $\alpha$  値を示す。各因子における Cronbach's  $\alpha$  値は全て内的整合性を満たす 0.60 以上の数値が確認された。

今後行ないたい運動・スポーツ種目数については、65 種目について「はい」を 1 点とし、合計得点を希望種目数とした。

分析は統計処理パッケージ SPSS11.5 を用い、従属変数に実施希望種目、コントロール変数として 2002 年時の運動・スポーツ実施頻度、健康自己評価レベル、2007 年時の運動・スポーツ実施頻度、健康自己評価レベルを用いた。そして運動・スポーツに対する便益期待値 5 項目を独立変数とし、強制投入法による階層的重回帰分析を調査対象者全体、性別、年代別に行なった。

#### 4. 研究成果

表 1 に、サンプル全体での重回帰分析の結果を示した。レジャー便益期待値、2008 年時の運動・スポーツ実施頻度、健康自己評価レベルにおいて統計的な有意性が見られた。標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) はレジャー便益期待値で .242 と最も高く、次いで 2007 年時の運動・スポーツ実施頻度の .147、2007 年時の健康

自己評価レベルの .131 であった。2002 年時の運動・スポーツ実施頻度、健康自己評価レベルについては影響力がほとんど見られなかった。2007 年時の運動・スポーツ実施頻度、健康自己評価レベルについては、 $\beta$  が小さくなったが統計的に有意な値が残った。運動・スポーツへの期待値においては、レジャー便益期待値のみ統計的に有意な値となった。支援便益期待値に関しては、統計的な有意性は見られなかったものの影響を及ぼしている可能性が示唆された。調整済み  $R^2$  値は .021、.080、.249 と変化した。

投入変数	【1】		【2】		【3】	
	$\beta$	$p$	$\beta$	$p$	$\beta$	$p$
【ステップ1】						
(2002年)						
スポーツ実施頻度	.060	ns	-.024	ns	-.020	ns
健康自己評価レベル	.147	**	.027	ns	.023	ns
【ステップ2】						
(2008年)						
スポーツ実施頻度			.171	**	.147	*
健康自己評価レベル			.215	**	.131	*
【ステップ3】						
(2008年)						
健康便益期待値					.084	ns
レジャー便益期待値					.242	**
競技便益期待値					.055	ns
情報便益期待値					-.032	ns
支援便益期待値					.151	ns
$R^2$ Change	.021		.080		.249	

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

表 1：サンプル全体の希望種目数に対する影響力

続いて、同様の変数で男女別に階層的重回帰分析を行なった結果を表 2 に示す。

最初に男性については、2007 年時の健康自己評価レベルとレジャー便益期待値で統計的な有意性が認められた。標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) は、レジャー便益期待値の .270 が最も高く、次いで 2007 年時の健康自己評価レベルの .215 の順であった。2002 年時の運動・スポーツ実施頻度と健康自己評価レベルについては、影響力はほとんど見られなかった。2007 年時の運動・スポーツ実施頻度と健康

自己評価レベルについては、健康自己評価レベルは統計的に有意な値を示したが、運動・スポーツ実施頻度の影響力はほとんど見られなかった。運動・スポーツへの期待値については、レジャー便益期待値のみ統計的に有意な値を示した。調整済み R<sup>2</sup> 値は .013、.055、.207 と変化した。

次に女性については、支援便益期待値、2007 年時の運動・スポーツ実施頻度において統計的な有意差が認められた。標準偏回帰係数 (β) は支援便益得点の .337 が最も高く、次に 2007 年時の運動・スポーツ実施頻度の .257 であった。2002 年時の運動・スポーツ実施頻度、健康自己評価レベルについては影響力がほとんど見られなかった。2007 年時の運動・スポーツ実施頻度と健康自己評価レベルは、運動・スポーツ実施頻度は統計的に有意な値を示したが、健康自己評価レベルの影響力はほとんど見られなかった。運動・スポーツへの期待値については、支援便益期待値のみ統計的に有意な値を示した。また、統計的な有意性は認められなかったものの、健康便益期待値も影響を及ぼしていると示唆された。調整済み R<sup>2</sup> 値は、.016、.102、.332 と変化した。

最後に、様の変数で年代別に階層的重回帰分析を行なった結果を、表 3 に示す。

まず、中年については 2007 年の運動・スポーツ実施頻度、レジャー便益期待値において、統計的な有意性が認められた。標準偏回帰係数 (β) は、2007 年の運動・スポーツ実施頻度で .330 と最も高い値を示し、次いでレジャー便益期待値の .235 であった。2002 年時の運動・スポーツ実施頻度、健康自己評価レベルについては影響力がほとんど見られなかった。2007 年時の運動・スポーツ実施頻度と健康自己評価レベルは、運動・スポーツ実施頻度は統計的に有意な値を示し影響が強くなったが、健康自己評価レベルはほとんど影響が見られなかった。運動・スポーツへの期待値に関しては、レジャー便益期待値のみ統計的に有意な値が見られた。調整済み R<sup>2</sup> 値は、.051、.109、.215 と変化した。

次に、高齢については 2007 年時の健康自己評価レベル、レジャー便益期待値で統計的な有意性が認められた。標準偏回帰係数 (β) は、2007 年時の健康自己評価レベルで .277 と最も高い値を示し、次いでレジャー便益期待値の .243 であった。2002 年時の運動・スポーツ実施頻度、健康自己評価レベルについては影響力がほとんど見られなかった。2007 年時の運動・スポーツ実施頻度と健康自己評価レベルは、健康自己評価レベルの影響は少なくなったが統計的に有意な値となった。運動・スポーツ実施頻度については、影響はほとんど見られなかった。運動・スポーツへの期待値に関しては、レジャー便益期待値にのみ統計的に有意な値が見られた。調整済み R<sup>2</sup> 値は、.019、.147、.306 と変化した。

投入変数	男性						女性					
	[1]		[2]		[3]		[1]		[2]		[3]	
	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p	β	p
【ステップ1】												
(2002年)												
スポーツ実施頻度	-.014	ns	-.089	ns	-.943	ns	.118	ns	.031	ns	.015	ns
健康自己評価レベル	.160	*	-.013	ns	.040	ns	.131	ns	.082	ns	.063	ns
【ステップ2】												
(2008年)												
スポーツ実施頻度			.080	ns	.980	ns			.266	**	.257	**
健康自己評価レベル			.277	**	.215	*			.170	ns	.060	ns
【ステップ3】												
(2008年)												
健康便益期待値					.033	ns					.191	ns
レジャー便益期待値					.270	*					.185	ns
競技便益期待値					.145	ns					-.057	ns
情報便益期待値					.034	ns					-.165	ns
支援便益期待値					-.046	ns					.337	*
R <sup>2</sup> Change	.013		.055		.207		.016		.102		.332	

\*p<.05, \*\*p<.01

表 2：男女別の希望種目数に対する影響力

	中年						高齢					
	[1]		[2]		[3]		[1]		[2]		[3]	
投入変数	$\beta$	p	$\beta$	p	$\beta$	p	$\beta$	p	$\beta$	p	$\beta$	p
【ステップ1】												
(2002年)												
スポーツ実施頻度	.176	ns	.064	ns	-.018	ns	.061	ns	-.025	ns	-.011	ns
健康自己評価レベル	.178	ns	.141	ns	.114	ns	.156	ns	-.066	ns	-.047	ns
【ステップ2】												
(2008年)												
スポーツ実施頻度			.292	**	.330	**			.145	ns	.087	ns
健康自己評価レベル			.011	ns	-.042	ns			.402	***	.277	**
【ステップ3】												
(2008年)												
健康便益期待値					.112	ns					.044	ns
レジャー便益期待値					.235	*					.243	*
競技便益期待値					-.063	ns					.148	ns
情報便益期待値					.074	ns					-.143	ns
支援便益期待値					.147	ns					.165	ns
F <sup>2</sup> Change	.051		.109		.215		.019		.147		.306	

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

表 3 : 年代別の希望種目数に対する影響力

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 長ヶ原 誠 「おじさんたちのフィールド・オブ・ドリームスを目指して」  
現代スポーツ評論、17:127-131、2007.11

[学会発表] (計 2 件)

- ① Makoto Chogahara: Social Strategies for Promoting Masters Sports The 7<sup>th</sup> World Congress on Aging and Physical Activity 2008. 7. 26-29
- ② 長ヶ原 誠 「アクティブエイジングの実現に向けて」ジェロントロジーからみた熟年期の運動・スポーツ、本部企画シンポジウム 第 57 回日本体育学会 2006. 8. 18-20

[図書] (計 1 件)

- ① 長ヶ原 誠 「ジェロントロジースポーツ総論」、『ジェロントロジースポーツ』日本工業新聞社 2007. 2 pp. 12-pp. 49 167 頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

長ヶ原 誠 (CHOGAHARA MAKOTO)  
神戸大学大学院・人間発達環境学研究所・  
准教授  
研究者番号：00227349

### (2) 研究分担者

石澤 伸弘 (ISHIZAWA NOBUHIRO)  
北翔大学・生涯学習システム学部  
准教授  
研究者番号：60368553

### (3) 連携研究者